

のぼり

〇〇の話

帝国少年作品集
ベルフエダイントRC22

WARNING! THIS IS UNPLEASANT WORK, FICTION, ADULT ONLY.
MINORS, THOSE WHO DISLIKE UNPLEASANT EXPRESSION, DO NOT VIEW.
警告！これは不快な作品,フィクション,成人向けです. 未成年や不快表現が嫌いな方は見ないで下さい.

帰宅の話

ガタン、とバスが揺れて目が覚めた…

ここ連日の残業続きで疲れが溜まっていたのだろう。
ウトウトと眠っていたらしい…

と、違和感を感じた。

原因は何だろう、とあたりを見回す。

どうやら普段とは違う道を走っている様子だった。

へもしや乗るバスを間違えたのだろうか…

しかし、そんな事はない。

急いで退社して、いつものバス停へ走り、いつもの最終バスにギリギリで乗った記憶は確かにある。

へすると気のせいかな？

見知った道を探そうと再度あたりを見回してみる。
すると、更におかしな事に気がついた。

バスの内部が異様に暗いのだ。

一応明かりはついてはいるのだが、ひどく弱々しい。

それにバス内部は至る所が錆びており、椅子の背など、みな薄汚れていた。
そして極めつけは、他の乗客。

皆、白衣裳だったのだ。

得体のしれない恐怖を感じへ早く降りよう！と停車ボタンを見るも、書かれていた言葉は《止まります》ではなく《死にます》という文字。

どうする事もできずガタガタと震え縮こまり、運賃表を見ると、運賃を知らせる番号がどんどんと減っていた。

それに比例しバスの内部も徐々に暗さと陰気さを増していく。

乗客はビデオの早回しの様にどんどんと年をとって骨と皮だけになっていき、中には既に干からびて白骨になっているモノもいた。

へあれは…もしかして寿命か…。あの番号が0になる時、自分は死ぬのか…

刻一刻と近づく死を前に、しかし停車ボタンを押す事もできない。

打つ手がなく、どうする事もできないまま、ついに番号が0になり、おもわず目をつぶる。

その瞬間、目を閉じていても分かる程の閃光が走った。

〈……〉

妙に暖かく穏やかな空気が自分を包んでいた。

〈……なんだ？……〉

恐る恐る目をあけると、そこは視界一面に遠くまで広がる、稲穂の草原だった。空は雲一つない澄みきった青色で穏やかな風は草原を海原の様に揺らしていた。そして草原の果てのその奥に、恐ろしく巨大な鳥居がたっていた。

〈俺は死んだんじゃないのか……？ココは一体何なんだ……？〉

バスは草原の中の道をゆつくりと規則正しく走っていた。

バスの内部は先ほどの状態が嘘の様に明るさにあふれており、バスの型は古いモノだったが、丁寧に使われているのか、綺麗に磨かれていた。

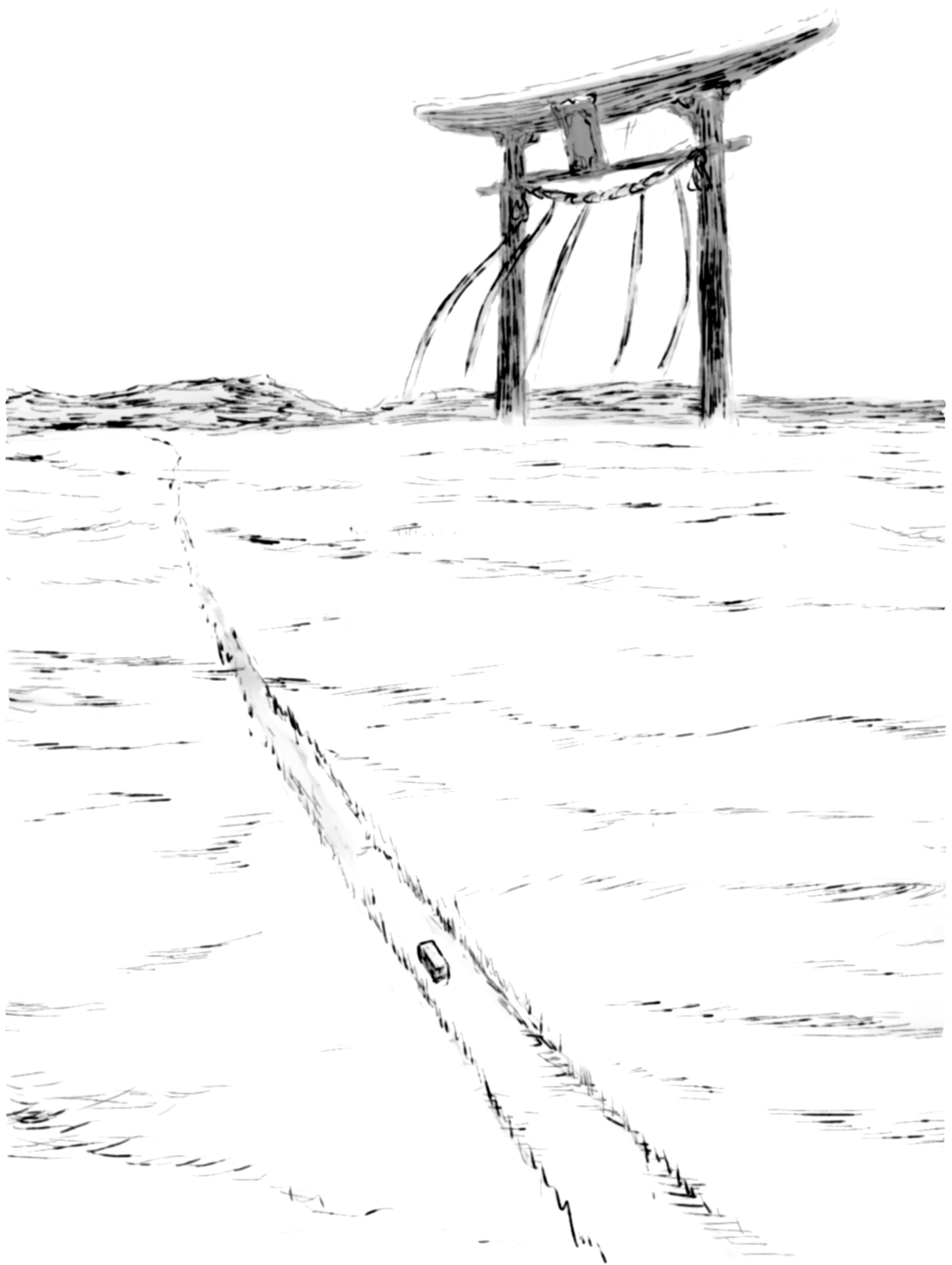
そして座席には年老いて痩せた老人や白骨は無く、赤いほつぺたをし、若さに満ちあふれた赤子たちがいた。

〈輪廻！まさか本当にあるとは！〉

乗客は見る見る間に育っていき運賃表は、0から1、2、とカウントを開始していた。

停車ボタンをみると、そこには『生きます』の文字。

へもしかしたら……このまま自分の年齢と同じタイミングで停車ボタンを押せば、以前と同じ状態で、現実の世界に帰れるかもしれない！！〉



僅（わず）かな望みを託（たく）して、停車ボタンを押す。
バスはゆつくりと停車した。

扉が開き、恐る恐る降りたその先はいつものバス停だった。

あたりは暗く、時刻もおそらくバスに乗った時と同じ様に思われた。

「本当に…？」

これまで起きてきた事があまりに突拍子もない事だった為、上手くいったのか疑心暗鬼になっていた。

へ本当に…元通りになつたのか…？

タクシーを拾つて急いで家に帰り、恐る恐るチャイムを鳴らす。

いつもの様に、玄関に明かりがついた！

やがてスリガラスの向こうに、彼を出迎え様と家のカギをあけにきた妻の姿が映る！！

「おかえりなさい」

扉を開け、いつもの言葉と共に妻が現れた！！！！

「ただいま！！！！！！」

へやつた……！俺は帰ってきたんだ……！

いぶかしむ様な顔で妻がつぶやく。

「あなた、ダレ？」

足跡の話

退社して家へ帰るべく電車に乗った頃、雪が降り始めた。

雪足は強く、駅に降りた時には、辺り一面、白銀の世界になっていた。

駅前広場には、家路へと向かう足跡が方々に散っている。

私はその一つを辿って、我が家へと歩きはじめた。

足跡を辿って歩いていると、ふと《真新しい、つもりたての雪に足跡をつけてみたい》という子供心が湧き上がる。

私の家は一戸建てで、公道の間には私道があるのだ。

家に近づくにつれ、一つ、また一つと足跡が散っていく。

年甲斐もなく、私は足早に、私道へと続く、角を曲がった。

一つの足跡が私の家に続いていた。

「なんだ、帰っていたのか…」

どうやら妻が、先に帰宅していたらしい。

私達夫婦は共稼ぎで帰宅時間がほぼ一緒なのだ。

私は少々がっかりし、そしてふと、気になる事を感じた。

灯りがついていないのだ。

「あら、先を越されたわね」

背後から妻の声が聞こえた。

日番里美（ひつがいさとみ）の話

「里美が昼食を残してる…！」

国子の一言で、教室は一瞬の沈黙の後、騒然となった。

昼食時、仲間内で固まって食べていた者達や、いち早く食べ終え、カードゲームに興じていた者達が、わつと里美を取り囲む。

「え？、里美が？！」

「病気？」

「何か悪い前触れなんじゃ…」

日番里美は、そこまで太ってはいないが、ふくよかな体格をしており、大食いで有名だった。

「何かあったの？失恋？相談にのるわよ」

陽子が額（ひたい）にシワを寄せ、哀れむ様に里美に話しかけると、のんびりとした、とろける様な独特の喋り方で反論する。

「もう、違うわよ？！近所にね、猫が捨ててあったのよ！」

場面は変わって放課後。

里美、陽子、国子の3人が、里美の通学路を歩いていた。

「なんで私が…」

と国子が愚痴（ぐち）る。

「二日前、家に帰る途中、田中屋の森から猫の鳴く声が聞こえるじゃない？何かな？って、覗いてみたの。」

そしたらダンボール箱があつて、その中に子猫がいたのよ！」

「ああ、あそこ」

「あの森は野犬も出るっていうし…あんな場所に捨てるなんてほんと、酷（ひど）いわ！昨日は寒さも一段と厳しかったし心配！今もお腹空いた！って泣いているはずよ」

「ああそれで昼食を残したのね」

と陽子が相づちをうつ。

国子が口を尖（とが）らせ

「そんなに言うならあなたが飼（か）えばいいじゃん」

と言うと

「そもいかないわよ、既にそうやって家（うち）に二匹、いるもの…」
と泣きそうな顔で里美が答えた。

「もうすごい剣幕で怒られたのよ！」

「もう拾ってくるな！」って。

今度やったら、代わりに私が捨てられちゃうー！」

ケタケタと笑う国子を無視して

「ねえ、陽子のお家で飼えない？、あそこ広いじゃない？」

「うち？…まあ、土地はあるけど…私、めんどくさいから、いやなのよ」

「酷（ひど）い！、寒い中、お腹を空かせて、たった一匹で震えている子の事を考えてみなさいよ！」

「はいはい、考えるだけなら考えてあげるわよ」

里美は口をすぼめ、頬を膨らませ



「もう！、昔っから陽子はそういう冷めた所があるのよね、そこ、治す所よ！」

森に到着した3人。

箱の中を覗き込んだ国子が言った。

「ねえ、里美」

「なあに？」

「猫、一匹増えてるわよ」

「ニャー」

「え？…あ！本当だわ…」

しばしポカンとし、そして怒りに顔を赤らめながら

「また、捨てていったのね？！ほんつとうにひどいわ！！」

陽子が静かに言った。

「里美、私がこの子の面倒を見るわ」

「え、本当！！でも、一度に2匹も大丈夫？」

「え、本当！でも、一度に2匹も大丈夫？」

「1匹よ」

「え…」

「昨日の寒さに耐えられなかったのね…」

その言葉に里美がじつと眠っている猫を見やる。

眠っている猫の額（ひたい）にも、鳴いている猫の額にも同じ特徴的な毛が生えていた。

陽子の言葉の意味を理解した里美が顔を歪（ゆがま）せる。

「…そんな…」

そう言ったきり、里美は陽子にすがりつき、肩を震（ふる）わせ泣きはじめた。

「墓地の隅（すみ）に陽の当たるといい場所があるの。そこに墓を築（きず）くわ。あなたも一緒に来る？」

涙を流しながら、里美は何度も何度も頷（うなず）いた。

動画配信の話

「私、動画配信するわよ！」

放課後の教室、高らかな声をあげ、国子が宣言した。

「そう…良かったわね」と陽子は答えた。

いや、そう答えるしかなかった。

国子が新しい金儲けを思い付いた事”だけ “はわかったのだが、それ以外がサッパリだったからだ。

馬に乗るかの如（ごと）く椅子に跨（またが）った国子が、ガタガタと陽子の席ににじり寄る。

先日ワックスをかけたばかりの床がキュツと悲鳴をあげた。

「あのね、今の携帯って、その場で撮った動画を配信（生中継）できるじゃない？でね、この…」
国子が器用に携帯を操作し、インターネットのページが表示された画面を見せてくる。

「ページでね、動画を配信すれば、閲覧者の数に応じてお金が貰えるのよ」

「へっ凄いわね」

国子の話に興味はなかったのだが、そういった仕組みがある事に興味を惹かれ、陽子は顔を向けた。

画面には一般人らしき人がパソコンゲームをやりなが、熱心に喋っている姿が映（うつ）つていた。

どうやらゲームをしている自身の姿を配信しているらしい。

「でしょ？だから後は」何を配信するか「だけなのよ」

「ああそれで…」

全てを悟（さと）った陽子が姿勢を戻しながら言った。

「でも嫌よ、私。そんなめんどくさい事」

「私もパスです、用事があるのよ」

その場にいた里美も国子の性格を熟知しており、陽子と一緒に返事をする。

一瞬キョトンとし、そしてムツとした表情で国子が抗議の声をあげた。

「わたし、まだ何も言っていないじゃない！」

「どうせ幽霊が出そうな場所に一緒に行こうって事でしょ？」

「そうそう、墓場とか廃墟とか。深夜に出かけようという魂胆ですわ」

「……」

押し黙る事数十秒、

「じゃ、私一人で行けつていうの?!怖いじゃないの!」
と、国子がきれる。

「なら止(や)めればいいじゃない」

しごく真つ当な事を言う陽子に、

「何言ってるの、これで生活している人だつていのよ、当たれば皆んな大金持ちよ!」
と、今度は作り笑顔で食い下がる。

が、まともに取り合わない陽子と里美は
はいはい、

と返事をするだけ。

二人の考えを変えられないと悟った国子が眉をひそめ口を尖(とが)らし、恨み顔で、
「もう分かったわよ、私1人でやるわよ」

とつぶやいた。

「その代わり2人とも私の番組、ちゃんとみるのよ！」

「なーに？せめて自分の最後を見届けろって事？」

と、陽子がからかうと

「違うわ、閲覧者が2人増える」

と、ボソツと言った。

深夜0時、自宅のベッドで横になりながら陽子は国子から教えられた例のページをひらいた。

あの後、一時間に一回の割合でサイトのURLと開始時間のメールを送ってくるのだ！

画面から、聴きなれた声が聞こえて来る。

「今日から始まった、国子チャンネル！」

毎週金曜夜、有名な心霊現場にリアルタイムで侵入、生放送します！乞うご期待！！

友達にも是非宣伝してね！フォローよろしく！！」

サイトの画面は3つに分かれており、1つには国子の顔のアップが、もう1つにはライトに照

らされた、どこかの森が映っていた。

携帯の表と裏にあるカメラの映像を、それぞれの画面に映し出しているのだろう。

3つ目の画面には白地に沢山の文字が並んでいた。

いわゆるチャットと呼ばれるもので、サイトの閲覧者がその場で打ち込んだ「頑張つて」だとか「気をつけろよ」といった文字が、次々と現れては消えて行く…

「へー凄いわね」

閲覧人数は1539とあった。

こういった事に疎（うと）い陽子ではあるが、今日開始した配信でこれだけの人を集めるといふのは大したモノなのではないかと思えた。

「記念すべき第1回目は某市にある、とある神社にやってきました」

国子が怪談番組のナレーターの様に声をひそめ、おどろおどろしく喋り始めた。

「この神社、かなり古くからある、由緒正しい神社なのですが、歴史があると言う事はそれだけ様々な出来事も経て来た、と言う事になります…

噂（うわさ）によると夜な夜な大量の人魂や怨霊が出るとか…

しかし噂はあくまでも噂…

記念すべき第1回目と言う事もあり、わたくし、今回キツチリとリサーチしてきました！

平日の昼、学校を風邪と偽って休んで……おうつと……ふふふ…周辺住民の方々に聞き込み調査をしたのです！！

………

ふー…

ありました…

噂は確かに……た、し、か、にありました……！

それではさつそく……入って見ましょう……

あつ！、神社の鳥居が見えてきました！」

〈結局、噂があるだけじゃない……〉

早くも飽きてきた陽子が、携帯に向かってツツコミをいれる。

「ん？」

陽子は小さな画面に映し出された《その鳥居》をじっとみつめた…

0時15分になり、里美は国子から教えられた例のページをひらいた。

「時間過ぎちゃったわゝまだやつてるかしらゝ」

「ピッ」

「きゃー!!」

スピーカーから大音量の悲鳴が流れて来た。

多少ノイズでヒビ割れているモノの、それは国子の叫び声だった。

「……………わっ……………!!」

ワンテンポ遅れて、驚く里美。

「なに勝手に神社(うち)録(と)ってるのよ!!」

しかも、人魂が漂(ただよ)う魔境(まきよう)への入り口だなんてそんな悪評!!」

多少ノイズでヒビ割れてはいるが以下同文、陽子の怒号(どごう)が響き渡る。

画面には国子の顔のアップと、国子を追いかける陽子の姿が映っていた。

里美



「…………あら……………」

国子

「だって、そうしないと視聴者数なんかふえないわよ!!」

陽子

「かー!!!!」

翌日の教室。

「陽子先輩!私、昨日の配信見ました!ファンになりました!!サインください!!!!」

「えっ…………ええ…いいわよ…………」

昼休みに訪れた、誰ともわからない後輩にそういわれ、差し出されたノートにサインを書きながら陽子は思った。

「なんのファンよ?!!」

のぼなし - ○○の話

のばなしの話

のぼる
〇〇の話

帝国少年作品集 ベルファダイ TRC 22

2025年12月16日第1版第1刷発行

著者、及び発行者 **TEI**

Copyright © TEI 2025 All Rights Reserved.

PRINTED IN JAPAN

◇この作品集は[アナログゲームのルールブック]に見せかけた画集です.[表現方法]や[作品集の構成,編集]は乱雑で,未完成作品も収録されています.

◇この作品集について[複写,または複製][その所持][その公開,配布]を許可します.

◇作品集公開,配布時は次の点に注意してください.[著作権は放棄しない.著作権は T E I に帰属する][著作権が T E I 以外の他者に譲渡されない様に扱う][作品集の内容を変えない.作品集全てを一括で公開,配布する.奥付も含める][公開,配布の媒体は問わない]

◇This collection is an art book disguised as an [analog game rulebook]. Its [presentation] and [structure/editing] are disorganized, and it includes unfinished works.

◇Regarding this collection, [copying or reproduction], [possession thereof], and [public display or distribution thereof] are permitted.

◇When publishing or distributing the collection, please note the following:[Copyright is not waived. Copyright belongs to TEI.][Handle it so that copyright is not transferred to anyone other than TEI.][Do not alter the contents of the collection. Publish or distribute the entire collection as a single unit, including the colophon.][The medium of publication or distribution is unrestricted.]



© TEI 2025
BT22.32.32